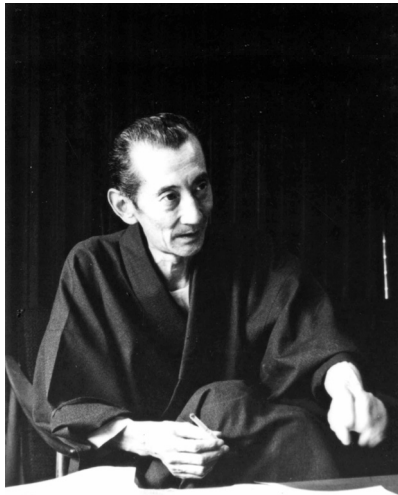


大江宏を知っていますか？ 1年前にそう聞かれていたら、曖昧な表情で「あまり知らない」と答えていたに違いない。大江宏は神社建築の大家・大江新太郎の息子であり、東京帝大での丹下健三の同級生であり、法政大学建築学科の礎を築いた建築家であり、モダニズムを経て国立能楽堂などの日本的な意匠で知られる、そのくらいの知識は持っていた。けれどもそれは客観的な情報にすぎない。大江の存在が生き生きと感じられ始めたきっかけは、若い大江研究者がインターネット上で大江の言葉を断片的に発信している ([http://twitter.com/Hiroshi\\_OHE](http://twitter.com/Hiroshi_OHE))、その言葉に触れたことだった。そこになにか真に迫るものを感じて、あらためて大江の著作を読み、その歴史的・文化的な広がりをもつ建築論の豊かさや誠実さが、大江に対してなんとなく抱いていたアナクロニクな印象を一新させた。こうした体験こそ、この特集で問題にしている「歴史が現在する」ということなのだと思う。

ここではその大江の言葉からいくつかを抜粋し、それに対する一つの現在の読みとして、大江と同じく法政大学で教鞭を執られていた富永讓氏に話を聞いた。企画に際しては、大江の長男で事務所の後継者である大江新氏（法政大学名誉教授）の全面的な協力を受けている。



大江 宏 (1913-89)

- 1913年 秋田市に生まれる。生後間もなく父・大江新太郎の赴任地、日光山内安養院へ。新太郎は日光東照宮の修理や明治神宮の造営に携わった建築家
- 1935年 東京帝国大学工学部建築学科に入学。同級に丹下健三、浜口隆一、一級上に立原道造ら
- 1938年 東京帝国大学卒業（丹下・浜口とともに辰野賞銅賞）。半年ほど浪人し、文部省宗教局保存課に勤務
- 1941年 文部省を辞し、三菱地所建築部に入所（～46年）
- 1946年 弟の透・修と大江建築事務所を設立
- 1948年 法政工業専門学校建設科創設、教授に就任
- 1950年 法政大学工学部建設工学科創設、助教授に就任（53年～教授）
- 1954年 約半年間、北南米・ヨーロッパ14ヶ国を旅行
- 1959年 《法政大学校舎》にて、文部大臣芸術選奨および日本建築学会賞作品賞を受賞
- 1962年 博士号（工学）を取得
- 1965年 地中海圏諸地域および中近東諸国を旅行
- 1970年 法政大学工学部長（～71年）
- 1973年 日本建築家協会会長（～76年）
- 1984年 法政大学を定年退職、名誉教授となる
- 1985年 日本芸術院会員となる。勲三等旭日中綬章を受章
- 1988年 日本建築学会賞大賞を受賞
- 1989年 逝去、享年75歳

※肖像写真撮影＝杉全 泰